

# 鎮守府憲兵隊の事件簿

snake710

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

「提督が鎮守府に着任・・・あれ提督？なんで私の下着がこんな机の中に？」「憲兵さん！この人です!!」ちよいとエツチなセクハラ提督と珍事件を起こす艦娘達。それを取り締まる憲兵は過労死寸前！深海棲艦も捕虜になるし、提督のハーレムは大きくなっていく。憲兵達は職務を務めきれぬのか!?これは愛と勇気の憲兵たちの記録である！

# 目次

第一話	下着泥棒の顛末	1
第二話	幕間	12
第三話	憲兵とは何か	29
第四話	提督育成計画(仮)	37



# 第一話 下着泥棒の顛末

ゼンマイ式の部屋に置いてある時計が動く。それは今時のようなデジタル時計のそれではない。古き良き時代に人の手によって動力が付けられた骨董品の類だ。

秒針が動いた時に、デジタルにはないリズムがその空間に刻まれる。それは不思議と安心感を与えているものだ。規則正しいリズムは体に良いとされる論文すらある程。だが、置かれている場所には気分のいい物はまるでない。

その場所は二人の男が向かい合って座っていた。中央には発熱型の電灯。片方の男の目の前には「調書」と書かれた黒塗りの冊子。一般人で言うところの取調室だろう。調書を持つ男は目の前の縮こまった男を睨みつけ、静粛がその場を支配する。その沈黙の最中、ゼンマイ式時計の秒針が規律よくその空間に響き渡る。長所をとる男はその音が好きで堪らない。何故なら、目の前にいる男にかかる重圧が一秒ごとに増えているのが分かるからだ。しかも、秒針の音の響きが静粛の空間に響き渡るたびに、男は怯える。「いい加減、認めましょう。言えば楽になります。それともまだやっていないと仰るつもりですか？」

調書をとる男は丁寧に訊く。しかし、声色には忍ばせたナイフのように怒気がこもつ

ているようにも思えてならない。

その取調室にはないものがあつた。というよりも彼らの服装がその空間を異質にみえさせているのだろう。

調書を取る男は大日本海軍第三種軍装。所謂、海軍陸戦用の軍服であつた。襟や雰囲気も見ると、軍曹の階級である。鋭そうな双眼や凛々しい顔つきからしても三十年代ではない。しかし、左上腕に付けられた「憲兵」と書かれた腕章の役職はあらゆる部署の軍属から嫌われている。一般兵曰く「戦場に出ずに、悪さをすれば捕まえに来る卑怯者」上層部からは「いつ自分に向かつてくるか分からない番犬」など、評判は悪い。しかし、強い軍事力を支える彼ら兵士を裁けるのは憲兵だけであり、軍法を守るのはほかならぬ憲兵なのだ。たとえ、泥水を啜ってきた兵士達に恨まれようとも構わない。例え、友軍兵を裁く罪悪感があろうとも友軍が犯した悪は決して裁かねばならない。そういう悪を許さないのを信条にして憲兵は職務を遂行するのだ。

「だから、俺はやっていないって言っているだろ！」

憲兵の向かいに座る男は叫ぶ。

男の格好は憲兵とは違い、第二種軍装。一般人からしてその姿こそが大日本帝国海軍の軍人とイメージする。その純白の軍服は少年の心を鷲掴みにして離さない。子供達のヒーローなのだ。そして襟や肩の階級章は憲兵から見れば、雲の上と言っても差し支

えないものだった。

「大佐」それは大隊長や基地司令などに着任できる階級であり、中間管理職の軍曹とは雲泥の差である。そして、目の前にいる男は艦隊を指揮する「提督」と呼ばれる地位についている。それは海の男の最高位の位と思つて欲しい。そんな子供の英雄とまで言えるその提督さんは椅子に座り、膝の上には手錠を掛けられた彼の両腕があつた。一体、どんなことをすればこんなことになるだろうか。国家反逆？スパイ？……様々な事を予想するだろう。しかしながら、これを読んでいる方々は肩透かしを食らうはずだ。

「嘘つくな!!」

バンツ!!と机を叩き、憲兵は怒鳴る。それを目の当たりにした若き提督は怯えて肩を縮こまらせる。憲兵は元陸戦隊の憲兵であつたこともあり、職務規定違反を犯した兵士を何度しよつびいたのか数えることもできない。彼は三十にも満たしていないにも関わらず、凄腕の刑事……いや、憲兵なのだった。

机の横の「証拠品箱」と書かれた箱から憲兵は袋に入ったあるものを提督に見せつけた。

刑事ドラマなら、殺人事件の決定的証拠や薬物。憲兵なら提督が部下を殺した軍用拳銃とかもありうる。しかし違ふのだ。憲兵が取り出したのは、白くて三角形。生地の良い

い真つ白いパンツであつた。

提督は気まずそうな顔をして憲兵から顔を背ける。

「俺はやってない!!」

提督は言うが、憲兵は提督の目を見て嘘だと分かり追い打ちを書ける。

「そうか、大佐殿? あなたは横須賀鎮守府の艦娘用の一番ドツクの更衣室で戦艦榛名の下着を盗んだ。」

「嘘だ!」

「いいや、更衣室から出てきたのを第六駆逐戦隊の雷に目撃されている」

「榛名は俺と風呂に入っていて……」

どつからデマカセを……。と憲兵は内心呆れるが、そのまま責め続ける。

「戦艦榛名に聞いたところ、あなたとは一緒に入らなかつたとか。ちなみに一番ドツクは空母加賀も使用中でしたので、加賀も証人ですよ」

「むぐぐ」

提督は反論の余地なく黙り込んでしまった。

彼は横須賀鎮守府のとある艦隊の提督。つまり、艦隊の指揮官である。その艦隊は普通の兵器とは異なる兵器を指揮している。軍艦に少女の魂と肉体が深く結びついた忌



まわしき兵器。突如として海から攻撃を仕掛けた深海棲艦を撃退するために作られた人類の最終兵器。それが『艦娘』である。事態は艦娘が多く量産され、戦場は人類の優位である。そのため、こういった不屈き者が出てきてしまうのはもはやどうしようもない。

「は〜．．．こんな大局に何をしているんですか」

「い、いや俺は榛名の．．．」

「よく聞こえなかつたですね．．．何ですか？」

「パンツが何色か見たかつたんだも．．．グヘッ!!」

その瞬間、憲兵は持っていた調書で目の前にいた提督の頭をひっぱたく。

「くそお！おれは大佐だぞ！」

「大佐も糞もあるか！あんたはラピ●タの バルスで目でも焼かれてしまえ」

憲兵は威張る提督に怒鳴る。提督は階級が高いので下士官が提督を裁けないのかと思うかもしれない。しかし、今は戦時下である。多数の左官クラスの軍人は艦娘を指揮下に入れて戦場へ赴くが、彼女らにだつて人権は存在する。軍人の規律は守ってもらわなければ軍そのものが機能しない。艦娘に対するセクハラ行為は佐官クラスの大量配置によつて鰻上りに上昇しているため、憲兵隊の相応の階級の持ち主は手に負えない状況になったのだ。

このため、大本営は憲兵隊にある種の「超法規的刑罰の使用」を認めることとなったのだ。つまり、階級が上でもきっちり裁けということである。

「た、頼む軍法会議だけは!!」

提督は涙を流し、懇願する。この時軍法会議に委ねる判決を下せるのは調書を取り「軍法会議の必要性を感じた」憲兵によつてなされる。憲兵は様々な条件を鑑みて判断を決めなければならぬ。提督の犯罪行為は軍法会議に処すべきか否か、そして軍法会議を行った際、どのように戦局が変わってしまうのか。憲兵は細心の注意を払つて決断を下した。

「いいだろう、軍法会議は中止する」

「おおー」

提督の顔は神に救われたような笑を浮かべる。彼にすれば、魔が差してやったのだ。些細な事であり、これしきのことではキャリアが水の泡になれば大変なことになる。憲兵は箝口令を敷き、口外はされていけない。既に海軍将校が艦娘にセクハラをしたことは海軍の不祥事であり、これ以上マスコミに叩かれては不味いという、大本営直々の憲兵隊への命令があったためだ。これを知っているのは第六駆逐戦隊の雷と榛名の両名であるから、二人に口止めをすればなんとかなる。

だが、大本営は「事件にするな」と言っただけであつて、「罰するな」とは一言も言つ

ていない。

「田中伍長と比口上等兵、銃殺用の目隠しと拘束用のロープ……あと武器庫から標的的を貰ってきてくれ」

「ちよつと！軍曹！何をしている!?!」

軍法会議をしないと云った手前、提督はいきなり銃殺刑にされると思い、立ち上がる。しかし、それを呼ばれて出てきた兵士二人が押さえ込んだ。

「私は会議を開催する要請は出していないが、あなたに罰を与えないとは言っていない。」

軍曹のセリフに提督は顔色を青くする。すると、憲兵は近くにあった内線電話の受話器をとった。

「こちら憲兵隊だが交換手、金剛姉妹に繋いでくれ」

「!!!! おまえ何を！」

憲兵は満面の笑みで答えた。

「そりゃ……犯罪者には罰を与えなくちゃ♪」

その笑みはまるで悪魔の微笑みに感じ、提督は憲兵の拘束を解こうと必死にもがく。しかし、悲しきかな。まるで、痴漢をしたサラリーマンのようにガツチリと押さえ込まれ拘束された提督は全く動かない。

「離せ！」

「二人共、第二試射場へ連れていけ」

「了解です」

「ちよつと、待てえ！」

提督は引きずられ、鎮守府の廊下で踏ん張ろうともがくが両脇に掴まった腕はそう簡単に動けるものではない。鍛え方が違うと言えよう。

「離せえ！話せば分かる！」

「問答無用だ。セクハラ提督には痛い目を見てもらわんとな」

某首相と青年将校のやりとりで聞こえかけたが、提督の懇願も虚しく廊下に彼の叫びが響き渡るのだった。

そして、三十分後。第二試射場と呼ばれる艦娘専用の練習施設には憲兵隊の他にも、艦娘達が集まっていた。一人は超弩級戦艦として英国のヴィッカーズ社で建造された金剛型一番艦、金剛である。巫女服にも見えるその服装は戦場では可憐な戦乙女として見える事間違いない。背中にマウントされた大口径の艦砲射撃で敵は殲滅されてしまふだろう。しかし、彼女は不機嫌な様子で腕組みをしていた。

彼女の他にも二番艦比叡、四番艦霧島。そして、今回の被害者である三番艦の榛名で

あった。被害者である榛名は大和撫子と言われても良い、黒髪長髪の似合うお淑やかな少女である。とても、戦艦を操り、大海原の戦場で戦っているようには見えない可憐な乙女である。そんな彼女は姉妹艦の霧島に背中をさすられていて、まだ涙を流している。

「提督うー……私という女がありながら、姉妹に手を出すなんて信じられないネ」  
そんなことを口にするのは戦艦金剛。彼女はかねてから提督を慕っていた経緯があるし、完全に提督に惚れていたのだ。あれほどの美少女に好意を抱かれているのにも関わらず、その姉妹艦に手を出すのは非常識である。憲兵隊の一部は提督に敵意を剥き出しにしているが、もう一隻敵意を剥き出しにしている者がいた。

「金剛姉さまが好きだと分かっているのに……!よりによって榛名に手を出すなんて!」

戦艦比叡は般若お面の鬼のようにして怒り、既に砲塔は提督に向けていた。顔を真っ赤にして起こっている姿は戦場でも見られない。見られるとすれば金剛が被弾した時であるが、今回は痴話。怒りは臨界突破である。

「憲兵さーん、私たちは何をすればいいんですか?」

語尾に妙なアクセントを付ける金剛は『MP』と書かれたヘルメットを被る先程の取り調べにいた憲兵に聞いた。

「そうだね、彼処に縛り付けられている提督がいるだろう?」

憲兵は数百メートル離れたところに指をさす。そこには一本の柱に縛り付けられた提督の姿であつた。後ろで縛られ、口に猿轡をハメられた提督は銃殺される反乱将校に見られるかもしれない。目隠しはあつたものの、戦艦比叡の提案で目隠しはなくなつた。彼女曰く「怯えている顔が見たい」とのこと。

「彼の近くには数々の標的がある。提督に当てずに全ての標的を破壊してくれ」  
「弾は実弾ではないのですか?」

榛名を宥めていた霧島は提督にゴミを見るような目で見つめている。憲兵は霧島にそんな目ができるとは知らず、軽く驚いたが質問に答えた。

「いや・・・、赤いペイント弾を使用する。提督が死んだら元も子もない」  
「いいじゃないですか、どうせ子孫残さないでしょ」

「!?!」  
怒りが臨界を突破した比叡は実弾が装填された砲塔を向けようとする。

「いやいや、駄目だつて!彼は貴重な指揮官の一人だ。セクハラ行為で銃殺刑にするわけにはいかない」

軍法会議にさえ銃殺刑に処せられてはいないのに、憲兵が勝手に銃殺刑、艦娘による艦砲射撃で蒸発したとなれば一大事である。そして、提督というのは、曲がりなりにも

軍隊の指揮官であり、これを輩出するためには国民の血税が掛かっている。むやみに首にすることも出来ないのだ。

「だが、罰を与えるなどは一言も言っていないだろう？」

憲兵はにやりと笑う。その真意に気づいた金剛達艦娘は成程とペイント弾をセットする。

「提督うゝ……私にすればよかつたの二……」

「榛名にするなんて許しません。塵となっていたいただきます」

「万死に値するわ！この比叡が天誅を……下します！」

横一列に並んだ金剛姉妹は圧巻である。最後に泣き止んだ榛名が並ぶ。

「提督の……エッチいゝ!!!」

金剛姉妹の四十一センチ連装砲は炸裂し、一斉射で提督に発射された。それは各鎮守府や泊地にいるセクハラを行う提督に対する艦娘の正義の鉄槌として、箝口令にも関わらず配備された艦娘の耳に入ることになったのだった。

## 第二話 幕間

下着盗難事件の二か月前……。

冬が過ぎ春。

雪解けの水が川に流れだすこの季節。

学校では卒業ムードで桜が舞い上がり、学校生活で培った友人たちとの別れを惜しむ涙。新たな旅路へと送り出す後輩達。日本の殆どでそのような光景が見られた。多くはその後、新たな学校や職場に向かっていく。そんな中、卒業証書を片手に祝う生徒が歩く歩道の横を一人の下士官が通りすぎる。第二種軍装である紺の軍服に身を包み軍曹の階級章を付けた男は卒業したばかりの生徒の横を通り過ぎた。

「今の見たか!?超カッケー!」



「今のは軍曹……しかも海軍とか！」

「俺も入隊しようかな？」

三人組の卒業生は通り過ぎた男を見て黄色い声を出す。誰しも少年の頃には軍人のような職に憧れる。純白の軍服に身を包んだ男は桜が舞い散る道を歩いた。目的地はもう少し歩いた先にあり、バス停が幾つかあるものの男の経験からしてその程度の道程でへこたれるものでもない。早めに出たため目的地に到着するのは早くなりそうだった。男は革のカバンを提げて歩き続けた。

微かに薫る潮風。潮の香りが男の記憶を呼び覚ます。入隊の記憶、きつい訓練とそれに耐え抜いた友人たちの笑顔。そして、海岸を血に染めた上陸作戦とその戦闘。砲撃と硝煙、仲間たちの断末魔。重く湿った戦闘服と相棒の小銃を片手に遮蔽物まで走る。しかし、また一人と仲間は凶弾で死に逝く。男は何名かの親しい仲間の顔を思い浮かべることが、すぐに頭を切り替えようとした。

陸戦隊の任を解かれ、運よく内地の憲兵隊の一員として本土に戻ることができた。これだけでもかなりの運に恵まれている。男は軍帽を被り直すと、登っている途中であった坂道を再び上り始めた。

「あれが……横須賀鎮守府か……」

男は坂を上り切り、鎮守府を一望できる丘の上に立っていた。大日本帝国の国旗と海

軍旗が潮風ではためいた。数多くのドックと多くの軍事施設が立ち並び、湾には何隻かの軍艦が航行する。航行しているのは日本海軍所属DDG-175「みょうこう」やDDG-178「あしがら」などだ。他にも何隻もの軍艦が停泊している。そしてここが男の仕事場になる基地だった。

坂を歩きながら、司令部から送られた書類を思い浮かべる。

『横須賀鎮守府特殊兵器区憲兵隊へノ異動ヲ命ズ』

特殊兵器区というのは一体何だ？ 大体、なんで憲兵隊として行くことになったのか。そもそも、どうして俺が？

男は様々な疑問を浮かべながら、横須賀鎮守府のゲートを通って配属先の憲兵隊の本部へと進んでいく。横須賀鎮守府はかなり大規模な基地となっており、横須賀が軍港として建造されてから増築と改修が行われている場所である。本部のある建物に男は入り、受付に座っていた兵士に声を掛けようとしてみた。

「お疲れ様です」

「え？」

そこには海軍の第一種軍装に身を包んだ女性下士官がいたからである。もう一度言おう。女性下士官である。

「どのような用件で？」

「あ、すいません。女性だったんで驚きました」

歴史を紐解くと、軍に所属する殆どが男である。女性は一割にも満たない。帝国軍の門戸は開かれているのだが、戦闘に参加する部隊ではなく後方支援に回ったりすることが多い。情報士官や高級将校の秘書をやることもあるのだが、粗暴な軍人を取り締まる憲兵に女性がいるのはあまりない。

彼女は髪を後ろでまとめてポニーテールにしており、彼女の艶やかな黒髪や項が見えるたびにドキリとしてしまう。軍の中でも中々お目にかかれない清楚系の美人であった。

「まあ、任務が特殊ですからね……」

「特殊？」

「一応、書類を見せて頂けますか？」

男は言われたとおりにバックから書類を取り出した。その書類をみた彼女はもう一度男の顔を見る。

「あなたが今度来ると言っていた人ですか。良さそうな感じですし、今からでも行きましょう」

行くつてどこへ？

男の頭の中では、普通に憲兵としての職務に就くと思つていたのだが、それは違ったようだった。

「私は如月 美佳曹長です」

「自分は劍崎 宏土軍曹です」

自身よりも階級が上だとは知らなかったため、焦りのあまり陸軍式の敬礼をする劍崎。それを見た如月は穏和そうな笑みを浮かべて立ち上がる。

「では行きますか。ついてきて下さい」

如月曹長はまるで友達の家に行くかのような足取りでデスクを出ると、そのまま憲兵本部の外へと歩き出す。劍崎は持っていたダツフルバックを持ち直しつつ、後ろに付いていく。

「前はどこにいらつしやつたので？」

「自分は南方の前線に」

「そうですか、大変でしたね」

劍崎は深く訊こうとしない彼女に幾ばくかの感謝の念を抱いた。陸戦隊の憲兵など、話すことなど何もない。多くは援助を求める同盟国や発展途上の国に赴いて治安維持を行う。その中でストレスの溜まった兵士達の悪行を止めて士気の低下や規律を守らねばならなかった。あるときは友軍の兵士を逮捕し、敵の捕虜に対しては友軍の兵士が

暴力を振るわないようにしなければならない。そして、敵の攻撃を阻止するために小銃を手にとつて戦うこともしばしばあった。

彼女は施設の合間の通りを抜けて、警備の厳しい場所にたどり着いた。基地の周りにはフェンスや鉄条網などがあるが、二人が来た区域はさらに警備の厳しい物だった。

高圧電流が流されている鉄条網に完全装備の警備兵。警備兵のストラップの先には軍用犬など。さらには、監視カメラも設置されている。明らかに鎮守府のなかにあるものではない。

敵の捕虜がいるのでは？

幾人もの敵性兵力の鎮圧や捕虜の引き渡しをやってきたこともあって、剣崎はゴクリとつばを飲み込む。彼らは常に脱出できるよう考えていると教わっている。憲兵はそのことを念頭に置いて彼らを監視しなければならぬ。ゲリラやテロリストなどなら粘り強い抵抗をするため手に負えない。

立ち止まった剣崎を如月曹長は微笑んだ。

「大丈夫ですよ。私も最初は驚きましたが、危険ではありませんよ」

「この区画は何を取り扱っているのですか？」

彼は恐る恐る彼女に質問した。

すると、彼女は彼の脇に立って耳元まで顔を寄せる。女性経験が豊富とは言えない彼

にとつてそれは胸が高鳴った。

「ここに言うのは危険ですが、ある種の動物兵器です」

動物兵器!?

劍崎は目を見開いた。

古来より人類の歴史を紐解けば、動物を利用して戦争を行っていた。騎馬隊や伝書鳩が典型的だろう。それらは軍需物資の運搬や動物自体が戦うことは少ない。しかし、近年訓練されている軍用犬などは対象をかみ殺すことも出来る。古代では像を使用して敵の軍勢を蹂躪したとして知られる。

しかし、現在は科学技術が発展し、動物兵器は比較的に少ない。軍需物資を運ぶトラックや敵を蹂躪できる戦車が出来たからだ。だが、遺伝子を組み替えた生物はどうだろうか。現在では、遺伝子改造や品種改造が進んでいる。映画をみれば不気味な皮膚の化け物が人を襲うなど、パニックホラーでよくある。例えば某ウイルスで変異した生物などどうだろう。それらは、敵を識別し、容赦なく敵を食い殺す。

だが、それは創作の産物である。現実ではない。しかし一昔前に空想とされていた物が実用化されている。自由に空を飛ぶ乗り物、どこでも誰でも話せる機械。たった一回のボタンを押せば、目標に爆弾が飛んでいき、数万もの人を奪う兵器。現在の科学技術など魔法と同じような物であり、過去からすれば現在の兵器群など化け物に等しい。

創作や想像は数百年、いや数十年経てば現実になるのだ。

その区画にはその想像の産物が密かに生み出されているのだとしたら？

劍崎は背中から冷や汗をかき、今まで以上に焦っていた。

「ほら、いきましよう」

上司でもあり、自分のタイプである女性に手を引かれて嚴重な区域に入る。彼女はまるで友達の家にも来たかのような様子で中に入る。彼女がけろりとしているのに自分は何でこんなに恐れているんだ？

劍崎は自身の情けなさに泣きたくなる。ふと、右手には女性独特の柔らかい手が握られている。上官とまるで青春ドラマのように手をつなぐ行為は軍人としてどうだろうか？

彼はそう思い、スキップしかけていた如月曹長を止めた。

「曹長、自分は……」

劍崎はそう言いかけようとして、ふと如月の行く先の廊下で歩いている人影を見つけってしまった。

その人物は海兵が着るようなセーラー服ではなく、女子学生が着るようなスカートの制服を着ていた。そして異質だったのはその身長や姿である。その人物、いやその少女は小学校にいてもおかしくない可愛らしい女の子であった。少し茶髪の掛かった

髪の色で後ろで髪をまとめ、纏っている雰囲気は大人しいという感じが相應しい。

「あ、電ちゃんだ！元氣してる!？」

「あ、如月さんなのです!？」

トコトコと擬音語がでてもおかしくない歩き方で彼女は如月曹長に近づいた。そして、如月曹長と言えば、まるで食虫植物のようにぱくりと両腕で少女に抱きついた。

「あ〜！可愛い!!!お持ち帰りい〜♪」

どこの雛見沢の竜宮レナだと、突っ込みたいのを抑え劍崎は質問しようとする。

「曹長、その子は……」

とすると、どこから現れたのか右目に眼帯をした柄の悪い女子高生っぽい少女が廊下を走ってきたではないか。頭にはまるで、パトレイバーのアンテナのようなもの（古典的に言うのなら鬼の角?）が着いていてランプのような物が紅く点滅していた。

「おい！如月い！電にまたお菓子をあげたろ！こいつは夜中に食べて昨日虫歯の治療したばっかなんだよお！」

「あら、可愛い子にはお菓子をあげろって言うじゃない?」

不良っぽい少女は如月に怒鳴る。怒る理由は正当であるが、不良っぽい少女は意外にも面倒見というか、子供好きなんだな。と劍崎は好感を覚えた。

「如月、それは『旅をさせろ』じゃないかな」



他にも、白く長い髪が煌びやかに風で靡く、海軍の略帽を被った大人びた雰囲気を持つ少女は如月の間違いを訂正する。

「いいじゃない！可愛い子にはあげたくなる物よ。はい、響ちゃんにはこれ」

如月が渡したのは、大正製菓の庶民に愛される板チョコである。響は渡されると頬を少し赤く染め、ロシア語で「Спасибо（ありがとう）」という。

「雷は？」

「あなたにはさつきパン屋で買ってきたメロンパンがあるわ！」

「わーい！」

電と見た目そっくりな少女の雷は如月の背中から出した紙の包みを渡されて、うれしいのか両手を高く上げて喜んでいゝ。子供らしさといえれば彼女が一番しっくり来るだろう。

「それと、暁ちゃんには・・・」

「ふん！子供扱いしないでよ」

と暁と呼ばれた黒髪と言うよりも青みがかつた艶やかな長髪が印象的な少女は如月の芝居がかった台詞に言い返す。そう言われるのを見越してか、如月は女性には決してやって欲しくない、いやらしい笑みを浮かべた。

「・・・なごよ」

暁は怪しさと気色悪さ満点な如月の笑みに若干引いていた。つか、こんな笑みも出来るんだと、剣崎も暁以上に引いていた。

「あなたにはこれよ！」

と如月が取り出したのはペンギンがイメージキャラクターのお菓子である。キャラメルをチョコで包み込んだ、子供に人気のチョコレート菓子だった。それを見た暁はふくれっ面になる。

「私だけそんな子供扱いして！」

「暁はまだ子供なのです」

「う、五月蠅いわね！あなただだって天龍の言いつけ守らなかった癖に！」

電は如月と言い合い、周りの二人の少女は笑い、如月は保護者のような笑みでその言い合いを見ている。

なんと心休まる一時だろう。昔はこんなこととして……いや待て！なんで日本海軍の中枢の基地の警備の嚴重な区域に少女に餌付けする下士官がいるんだ!?! どう考えてもなんでこんな所に子供がいるんだよ！

剣崎は状況がよく分からず、壁に手をついてもう片手で顔を押しさえた。剣崎の混乱を増長するかのように如月と少女達の戯れはエスカレートしていく。

「おい、あんた。如月の同僚か？」

「ああ、ここに配属になったらしい、憲兵隊所属の剣崎軍曹だ。そちらは？」

眼帯をつけた不良そうな少女はにやりと微笑み、親指で自分を指して自己紹介をした。

「天龍型軽巡洋艦『天龍』だ。駆逐艦を率いて水雷戦隊を率いているんだ。どうだ、怖いだろ？」

その台詞はまるで暴走族のヤンキーが自分の族を率いていると自慢しているようにしか聞こえてならない。その率いているのが可愛い少女達だと思おうと剣崎は笑いがこみ上げてきた。

しかし、軽巡洋艦？駆逐艦？自分の事をそのように読んでいたが一体どういう事なのか。もしかして、新手の厨二病の症状なのかも知れない。それなら、あたまのアンテナもそういうことになる。これは所謂コスプレなのだ。天龍型駆逐艦など既に80年前に退役してしまっている。それを名乗る女子高生もどうかと思うのだが、やっぱりこれはあの病気の一部分のだろう。

「そうか、うん。ちゃんと現実を見るんだぞ」

と剣崎は身長差があるためか頭を撫でる。つい、アンテナがどうなっているか知りたくて触ってしまう。

「んう！・・・馬鹿あ！お前何処触っているんだよ！」

「え？頭だけ。それにしても、これどうやって取り付けたんだ？」

「ついつい、パトレイバーのようなアンテナなのでどう取り付けているのか知りたくなった。剣崎は根本やランプの部分に触ってみる。」

「ひやつ・・・ちよつ、だめだつて、んう・・・」

「ん、これやばい。なんとというか接着剤で取り付けているのか、付け根の部分がなく引っこ抜けばいいのかと剣崎は思う。だが、触られている天龍はほほを真つ赤に染め、なにやら艶めかしい声を出すように至っていた。それを気がついた如月が焦った様子で駆けつける。」

「え、剣崎さん。何を？」

「いや、このコスプレ少女がどうやってパトレイバーのようなアンテナ取り付けているか気になって」

「こ、コスプレじゃねーし！つかパトレイ？・・・どうでもいいから頭を触るなあ!!」  
「あ、あれが女をオトすつていうことなのね！」

「暁のませた発言は置いておき、コスプレでもなく、パトレイバーのアンテナでもないことを説明するため、如月は彼女たちの存在意義について話した。」

太平洋上に現れた第二次大戦時の旧米軍の艦艇を模したような所属不明船舶。それは地上の何処の国の所属でもなく、深海から現れた軍勢の者だった。近くを航行していた船舶を無差別に攻撃し、海軍の駆逐艦ですら撃沈せしめた。日本海軍は謎の軍勢の事を深海から来ることから深海棲艦と呼称した。

ほどなくして、日本の海岸に数十人の少女が流れ着いていた。彼女たちは自身の事を「艦娘」と呼び、かつて日本の為に戦った軍艦の生まれ変わりだという。彼女たちは自分の軍艦の生い立ちを正確に覚え、現在でも明かすことの出来ない軍事機密さえ正確に覚えていた。そして、特殊能力など様々な技能があることが分かった。彼女達は『提督』と呼ばれる契約者を定め、六人から12人までの艦隊を組んで任務に当たる。

彼女たちの任務は打ち果てた船舶の亡霊である深海棲艦の撃退だった。彼女らは昔の故郷であった海軍に協力を頼み、今に至っていた。

「どうだ、わかったか？」

如月の説明が終わり、天龍が剣崎の理解度を訊くために彼の顔を見る。その顔はどう見ても帝国海軍時代の軽巡洋艦の面影は感じられない。こんな子が兵器なのかと疑問に思う。だから、彼の答えは決まっていた。

「分かるわけないだろ！」

「なんでだよ！あんなだけ、如月が説明したのに！」

如月の説明で納得するのは頭のネジが幾つかなくなっているのだろう。まっとうな人間ならそれを真実だと思うわけがない。思えるのは、彼女がその敵である深海棲艦の撃退をしているのをはつきり見れば認めざるおえないだろう。

「つたく、あたままでつかちの野郎だぜ」

「天龍、そういうことは言わないの！」

「だつてよく、こいつ如月の言ってること信じちゃいけないんだ。こんな奴にここが守れるのかよ。怪しいもんだぜ」

天龍は気分を悪くしたのかその場を立ち去ろうと背を向けた。すると、劍崎は口を開く。

「そりゃ、今まで知らなかった物に触れるんだ。今の話で納得する方がどうかしている。だがな、これは上からの命令だし。それに……」

劍崎は少し言葉を濁しつつも言葉を続けた。

「こんな可愛い女の子を守らなければ男の恥だろう。どんな任務だろうと日本男児なら黙ってやるまでさ」

その言葉は男なら誰しも思うことだ。もし、彼女らが傷つくのなら男なら黙って盾になろう。女子供を見殺しにするぐらいなら命を捨てるなど造作もない。それが、日本海

軍の軍人。いや日本男児としての責務であろう。

劍崎家は代々海軍軍人の家系である。軍人とはなんであるかを教え込まれた根っからの軍人である。そうした、家系からか劍崎の信念としては現代の価値観としては古めかしくも潔く素晴らしいものを受け継いでいた。

天龍は照れくさくて後頭部を搔く。

「ふふつ、お前のような奴がここに来てくれて助かったぜ。出来るなら、今からでもお前を提督にしたいぜ」

「だが、もういるんだろ」

「ああ、残念だがな」

天龍は残念そうに言うが、それでも今の提督を好きでいるに違いない。すると天龍は何かをひらめいたのか、近くにいた雷を呼んだ。

「天龍、どうしたの？」

「いつも提督が来たときにいう奴やってやれよ」

「あれ？」

「そう、少しアレンジしてやれ。」

お茶目つ気のある天龍は劍崎に背中を向けて雷に聞こえないよう耳打ちする。すると、雷は理解したのか、うなずいて劍崎の目の前に立った。

「軍曹が鎮守府に着任しました！これより憲兵隊の指揮を執ります！」



### 第三話 憲兵とは何か

艦娘達と出会ってからというものの、劍崎軍曹は自分の職場がかなり恵まれているのか悟った。まだ、極秘とは言えど国を救う少女達と仕事が出来なのだ。むさ苦しい男の犯罪を取り締まるより、可愛らしい少女達が起こす事件を処理する方がずっとよい。

劍崎は如月曹長、そして何故かついてきてしまった軽巡洋艦天龍と共に艦娘専用宿舎の隅にある憲兵詰め所にやってきた。

そこは『憲兵詰め所』と見事な達筆で描かれていた板を扉の前に下げていた。中に入ると、二人の兵士が椅子から立ち上がって敬礼する。

「如月曹長殿、そちらがあなの？」

「ええ、この人があの有名な『眠りの小五郎』よ」

「落ちぶれ探偵と一緒にしないで！」

突然の如月のボケに咄嗟に突っ込む劍崎。もはや、上官の威厳もあつたもんじゃない。そんな突っ込みをいれて、それを見ていた二人の兵士は吹き出してしまふ。

「如月曹長、それをいうなら湾岸署で働く脱サラした刑事でしょ」

と今では珍しいレンズが丸いメガネを掛ける兵士は言う。

「いやいや、そこは特車二課のレイバードライバーとか?」

最早、ロボットアニメの登場人物にまで手を出したのは、三十代前後の兵士である。少し顔長で高身長の彼はこの部屋の中で一番背が高かった。

軍隊という規律と粗暴な雰囲気のない憲兵達で本当に大丈夫なのかと頭を抱えそうになる。剣崎は壁に手をつけてため息を吐きたい衝動を抑えつつも、一応自己紹介をした。

「南方から来た剣崎軍曹です。よろしく」

「自分は田中 昭夫伍長です。よろしくお願いします」

一応は上官とは思っているのか、メガネを掛けた田中伍長は敬礼をする。

「私は比口 慎一上等兵です。私も前、南方でした。」

敬礼した後、剣崎は両名と握手を交わす。比口は既に妻子がおり、この中で一番の年長者であった。元々、軍人ではなかったらしいが、多くは喋らない。

「いやあ、やっとツツコミ役が来てくれて助かりました!」

「如月曹長もボケなので困ったもんですよ」

「そういう君達こそボケばかりじゃないの!」

ボケボケと言われていたのが嫌だったらしい如月は二人に対してもボケ役と言い始

めた。

しかしながら、違う如月曹長殿！あなたはボケではあるが、単なるボケではない。天然ボケである。

そんな事を考えていた劍崎はよく考える。彼等は憲兵として少し不安であるが、艦娘を補導する位なら彼等でも充分だろう。しかも、比口上等兵には妻子がいる。娘のように艦娘を見るだろう。軍隊で犯罪を取り締まる憲兵より彼等が適任である。

「まったく、だらしねーな」

と天龍は腕組をして壁にもたれていた。見た目からしてどつかの不良であるが、普通の不良少女にはない角のようなアンテナらしき物はピクピクと動いている。

もう一回触つてみたい……。

劍崎はそれを見ている内に何故頭にそれがあるのか触りたくなつた。先ほど、如月曹長に止められたが、やはりそれが何なのか確かめる必要があつた。

そんな劍崎の考えは直ぐに天龍に伝わる。それは当然だろう。手が何かを触るような感じで動き、足も彼女に向いていたのだから。

「ちよつと、待て。話せば分かる！」

彼女は自分の危機を察知する。だが、憲兵としては目の前の不良少女を更生させる必

要があるのだ。劍崎はそれを行使するだけである。

「天龍！そこで気をつけ！」

劍崎も伊達に憲兵として兵士をしょっぴいていっているわけではない。その声は精神的には未熟な少女の天龍にしつかりと伝わる。まるで、鬼教官に罵声を浴びた新兵のように踵を揃えてしまう。

「つたく、お前はスカートの丈が短い！そして後ろのシャツが出てる！第2ボタンは開けるな！ネクタイもだ！」

「あんたは何処の教師だ!!」

天龍の叫びも最ものである。しかし、不良と呼ばれても仕方がない格好をしているため彼女の叫びは虚構である。よって、回りの憲兵は助けない。むしろ、劍崎の味方である。

「最近の艦娘は風紀が乱れているからな」

「軍曹どの、やっちゃってください！」

「天龍ちゃん、ドンマイ！」

比口は冷静に分析し、田中は大いに賛同する。以前、仕事中に漫画を彼女に奪われたから根に持っている。そして如月も服装に関して寛容であったが、間違いを正すことに対しては抵抗がないのもまた事実である。劍崎のやることは正しく、それを邪魔などしない。ただ、運が悪かったとしか言えないのだ。

どこかの校則のきつい高校の生徒指導室の先生のように剣崎は天龍の不良と思える服装を正した。今後、不良っぽく振る舞う艦娘達からは「先生」と侮蔑と恐怖を含んで剣崎軍曹は呼ばれたと言う。

それから十分後、不機嫌な様子で艦娘用の兵舎の廊下を歩く天龍の姿があつた。そこに姉妹艦である龍田が遭遇する。

「あ〜ら！天龍ちゃん、イメチェンかしらあ〜」

おっとり系S艦娘とMな提督には知れ渡る龍田であるが、彼女は重度のシスコンであることも頭に入れて欲しい。彼女が見たのは天龍の姿である。何時も不良のように着崩された制服が今では校則に則った女子高生の制服に早変わりした。

スカートの丈は膝下になり、後ろから僅かに出ていた白いシャツは中にしまわれている。そして第2ボタンは閉められ、ネクタイもしっかりと絞められている。

「龍田、俺が好きでこんな格好するかよ」

「そうなお、でもその格好も似合つてて可愛いわよお」

龍田は悪戯じみた笑みを浮かべる。案の定、「可愛い」という言葉に反応して、顔を真っ赤にさせた。

「う、嬉しいな。まったく新しく来た憲兵の野郎は何処の教師かつての！」



天龍を風紀指導していた時、劍崎軍曹は自身の天職だと悟ったと同郷の友人に話したと言う。今まで、犯罪を犯した兵士をしょっぱく仕事をしていた劍崎にとつてこんなに楽な仕事はない。更に指導をしている内に天龍のような艦娘に対して抱く感情があった。

それは妹や年下の子供を叱る親のような感情だろう。この叱ったことによつて成長して欲しい。しっかりと大人になつて欲しい、そんな気持ちを抱きながら指導を行う。それは、教師が生徒に指導を行うような感情に近くないだろうか。

劍崎は幼い頃、教師を夢見たことがある。しかし、自身の能力を鑑みても妥当とは思えない。だから、自身の能力が存分に発揮される職業である軍人を選んだのだ。なので、教師と同じような子供と接する職場になつて良かったと劍崎は思っていた。

「思っていたんだが……、どうしてこうなつた？」

一度は夢であつたもの。しかし、目の前に居るのは……。

「俺じゃない！俺は触つてない！」

「嘘よ！提督！貴方が私のお尻を撫でていたのは皆見ていてよ！」

「提督……、帝国軍人として恥ずかしくない？」

それは朝っぱらの駅のホームで行われる痴漢と被害を受けた女性の会話である。その横で駅員ならぬ憲兵の田中は提督のベルトを掴んで逃げないようにする。

「(どうしてこうなつちやつたんだろ?)」

劍崎はため息をこぼし、田中伍長に命令する。生徒指導を行う憲兵などいる筈もなく、あるのは犯罪に当たたる憲兵である。

「田中、五十鈴と共に憲兵詰所の取調室な。あと内線で如月呼んで」

劍崎は手慣れた様子で命令する。そう、これで今週三度目の痴話事件である。

提督は自身の身に起こる事を考える。それは最悪軍法会議で懲戒免職である。そのため、暴れるが腰のベルトをつかむ田中は暴れる提督を押さえ付けると、拘束用のストラップを使用して拘束する。

「離せえ!!俺が悪かったあ!!」

廊下に響き渡る提督の声は艦娘のいる宿舎にも聞こえた。劍崎はそんな叫び声中でもまた溜め息を吐く。何度目であろうか。艦娘の宿舎でも同様のため息は吐かれていた。



## 第四話 提督育成計画（仮）

横須賀鎮守府は歴史ある施設である。それは幕末の開国から遡る。大日本帝国海軍の主要軍事基地であり、そこに司令部が置かれるのは当然の既決とも言える。新旧様々な建造物が立ち並び、海軍の将校や下士官、または兵士がひっきりなしに歩く。

施設では極秘施設など、普通の職員であろうとも入れない場所が存在する。言つてしまえば、許可無くそこに入ると軍規に触れた者として拘束されて、軍法会議に掛けられるのである。軍事機密としてもレベルが高いその場所にいつものように甲高い悲鳴が響き渡った。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアア!!」

軍事機密のあるエリアは基本的立ち入り禁止である。例え、そこから弱い少女の悲

鳴が聞こえたとしても原則立ち入って良い物ではない。でも、そこを通る職員は聞こえてしまい、驚いたような顔をして行く訳なのである。他にそれを聞いた佐官や将官あたりになると「またやつてる」「おれも彼処へ！」と羨望と侮蔑の視線を交えながら行くわけ。区画を守る警備兵からしてみれば、胃薬が幾つあっても足りないわけである。

「ここつてさ、音通らないんだよな」

区画の出入り口を守る警備兵は横にいる同僚に声を掛ける。

「ああ、お偉いさんがこの子供達の声を聞こえないようにしたとか」

「しっ！声が大きい」

ここにどのような人物が住んでいるのかということは門外不出の情報である。警備兵は立场上知る訳なのだが、万が一漏れた場合は首が飛びかねない。若しくは、辺境地へと送り出される可能性も考えられる。自身の失言を認めるように口を手で塞ぐ兵士は同僚に先ほどの答えをもう一度伝えた。

「壁は防音にしてあるし、窓にも二重の防音窓が採用されている。まあ、この場合はあれなんじゃない？」

彼らはこの区画内にある憲兵の詰め所を思い出す。人当たりの良い4人の憲兵達。彼らは彼処で何をしているのか。出来れば、あんな仕事はしたくないと首を振った。

警備兵がそんな悠長なことを言っている間、艦娘のいる中の区画ではとんでもない痴態が繰り広げられているなど、彼らを知るよしもなかった。

「落ち着け！俺は赤城のお尻を触つてないんだからな！加賀、その南部を下ろせ！」

「無理ですできません承服不可能ですあなたを蜂の巣にしないかぎり私の怒りはおさまりません」

「うわわあ、私の次に赤城さん。正妻の加賀さんがいるのにいいい」

「羽黒落ち着いて、提督うう？ちよつとお話（物理的な）しましょうか」

そこには涙目の赤城と無表情で息継ぎもせず、自分のやりたいことを言い切った南部拳銃を構えている鬼神加賀と赤城と同じく被害者の羽黒。そしてその姉である足柄の手には海軍でも悪名高い精神注入棒が握られていた。

「さーて、提督。処女航海しますか？艦娘のお尻が好きそうですから、これを刺して行けばよろしくて？」

「足柄おちつけって……。あ、そうだそうだ。今度エリートづくしの合コン連れてつてやるからさー！」

「……くつ、ケツコンカツコカリで正妻の加賀に同じようなこと言つてご覧なさい？」

「あ……はなせばわかる？」

「問答無用」

ここは首相官邸でもなければ、提督にふさふさの髭が生えているわけでも、名字に犬がいるわけでもない。ただ、海軍将校に対して艦娘が同じような台詞を言うなんてどんな当て付けだろうか。

一方、止めようとしていた憲兵であったが、割って入れれば南部を発砲しかねず、よく見てみれば某B B弾で撃つ精巧なエアガンであるため危険はない。しかし、足柄から譲渡された海軍精神注入棒を持っていて戦艦並みに火力が増強されていた。

「もうやだ、この軍」

その光景を見ながら、憲兵の劍崎軍曹はため息を付きながら頭を抱えるのだった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

海軍には元々憲兵は存在しない。日本の憲兵とは一般的に陸軍である。そもそも、海軍に憲兵と同様の軍事警察機関を持つていなかったのだ。そのため陸軍から出向した憲兵が海軍司法警察官となり、捜査を行っていた。しかし、検察官を務める海軍の法務士官が指揮官としており、部下の犯罪は隊長が軍の憲兵としての役割を担っていた。簡単に言つて、部下の後始末を上司が警察官となつて取り締まっていたと言つても良い。

しかし、あの戦争の際に占領地の増加に伴つて陸軍出向の憲兵では人手不足に陥つた。平時ならともかくとして、戦時中の高ぶりが押さえられない兵士達。そして、占領地の警察機構としての運用。海軍は新たに軍内部の犯罪を取り締まる軍事警察機関を設立した。

海軍特別警察隊と呼ばれ、警察としての役割の他に防諜にも携わっていた。当時の規模としては軍全体の組織としてではなく、占領した地域一帯のために作られたものであるため、当然鎮守府勤務などはなかった。

戦争終結後、海軍は特別警察隊の軍事警察と防諜任務を分けるために海軍警察と海軍情報局の二つに分離。海軍警察は陸軍の「憲兵」という呼び方を残したまま現在に至っている。他にも「海警」とも呼ばれるものの海上保安庁とも、被る恐れもあるため、殆ど使われてない。英名としても「Military police」と呼ばれるため大差ない。

任務も陸軍憲兵と同じくして、軍内部の犯罪を取り締まるなどしている。そして、日本の鎮守府に設置された区画にも同じ事が言えた。

「でもさー、僕何もしてないんですけど」

「分かってる。君は何もしてないのは知ってるからさ」

この風景はどこかで見たことがある。交番で勤務しているお巡りさんが小学生が落ちていたと百円玉を届けるシーン。お巡りさんは報告書に記載しようとしていたが、それに価値があるだろうか、そして子供の善意に報いるために、警察のある制度を言つて百円玉を返したりする。実際、有つてはならないことだけれど、それはフィクションであるため現実には起こらなかつたりする。そもそも、百円を拾つた子供が交番に届けるなんて光景を見たりはしない。

・・・話はそれてしまつたが大体のイメージはつかめていると思う。憲兵が椅子に座り、書類を書いている間、それを見ながら緑茶をすする子供の姿が。

その子供の服装はこの憲兵詰め所の中では一番位が大きかつた。彼のために特注で作成された純白の第二種軍装。肩の階級章には中佐のものを取り付けてある。

これはコスプレか何かだと思いたい。だが、実際の所。この少年は大日本帝国海軍の将校なのである。上官である。もう一度言おう上官である。さらに大事なことなので三回言つてやる。この小学生が上官なのだ。

「軍曹さん、目が据わってます」

「おっと、失敬失敬。そういえば中佐は今年で11歳でしたね」

直属の上官ではないものの、彼が上司でなくてよかつたと彼と話す剣崎軍曹は安堵した。中佐は11歳とは思えぬような愛らしい容姿であり、くりりとした目や愛くるしい表情を見るに、同姓の彼でさえ、可愛らしいと思わせるのだ。中佐の写真をネットにアップすれば、世のシヨタコンが鎮守府に列を成して現れること必須である。もつとも、軍曹の場合は異なる。彼の場合、それは自身の子供や姪と接するような。悪く言つてしまえば孫を甘やかすおじいちゃん的な。庇護欲が掻き立てられる訳なのだ。

なぜ、彼が海軍中佐という地位についているかというと全ては艦娘に関係している。彼女達がどのように日本を守護するようになったのか、それは艦娘と契約する「提督」に関係している。契約とかこの厨二病と言われるかもしれないが、彼女たちの契約は重い。彼らは所謂「波長」の合う人物を提督と仰ぐ。提督は男でもあれば女性でもある。彼のような小学生もあれば、海軍を退役した老将軍であつても珍しくない。彼女らは軍属やどつかの民間人を「提督」と定めていた。

そんな提督と仰がれ、可愛がられるシヨタ中佐は、とある相談のために憲兵詰め所に来てきている。

「あ、はい。小学校ならば五年生です」

（あくやばい。俺の息子なら毎日お菓子かおもちゃを買い与えそう）

劍崎は自身に宿る庇護欲や父性本能が昂ぶっていることを悟る。

「そうですか、まあ勉強大変でしょうね」

「大丈夫です。いつも、秘書官の翔鶴に色々教えてもらっていますから」

このシヨタ提督は秘書官に正規空母翔鶴を任命している。銀色の髪に赤と白の巫女のような服を着ていて、弓から艦載機を発艦させる彼女。空母の艦娘は容姿や性格は他の艦と違って落ち着いた高校生または大学生のような雰囲気である。小学生のような駆逐艦とは同級生として見られがちな彼は頼れるお姉さんとして秘書官を翔鶴に選んだのだろう。

すると、シヨタ中佐はもじもじと顔を赤らめながら顔を伏せ始める。その様子に劍崎はどうしたものかと思いを馳せるが、とある答えに行き着いた。

「そうか、これは恋だ。」

劍崎はそう理解した。誰しもこういう体験をしたことがあるだろう。小学生の時に近所に住む大学生のお姉さんに恋心を抱いてしまうのだ。まだ、幼い自分は自分の気持ちがよく分からず、わかった頃には、そのお姉さんはどつかへ引越してしまふ。そんな淡い恋心をどうしたらいいのか分からず、顔を知っている良き相談相手の憲兵さんに



彼は訪ねてきたのである。

劍崎はより良い助言が出来るかどうか不安に思うものの、それ以上にシヨタ中佐に頼られていることに嬉しさがこみ上げていた。

劍崎は意を決して彼に事情を聞いてみた。

「中佐、どうされました？」

「えっと、ここに来たのは内密に相談したいことがあつて」

もじもじとしながら話す中佐の頭を撫でたい衝動に駆られながらも、我慢しながら彼の言葉を聞いていた。

「いいでしょう、この話は私と中佐の秘密ということで」

詰所の窓を閉め、中佐の急須に新たな緑茶と机の引き出しからお茶請けを出す。劍崎は長い話になるだろうと思つたのか、姿勢を楽にして襟のボタンを一個外して話を聞いた。

「さつきも話したんですけど、よく翔鶴が勉強を教えてくださいるんです。それで、学校の勉強以外にも海軍の教本もよく勉強させられます」

彼はまだ義務教育を終えておらず、修了した大人向けの本も艦隊運営のためには読まねばなるまい。彼の台詞から察するに、彼女は殆んど全てを教えていた。

「色々やつてたんですけど、分からない科目があつて」

と彼は持っていた革製の鞆から一冊の教科書を取り出した。それは、誰しも学んだが、同時に子供達にとつてある意味敏感な科目。保険体育であった。

劍崎は成る程ね、と腕組みをする。彼は十一歳。大人への階段を登ろうとしている第一段階である。身長は伸びるし、男らしくもなる。筋肉質になったりするだろう。突然の変化に彼らは戸惑いを覚えるだろう。その戸惑いや疑問を解消するためにその科目は存在した。

「保険体育か、懐かしいな。何処が分からないんだい？」

「えっと、本当は全部分かってるから大丈夫なんですけど……」と彼は言葉を濁す。劍崎はどういう事なのか疑問を抱く。すると、なぜここに来たのかポツリポツリと話し始めた。

『翔鶴お姉ちゃん、これ教えて』

彼は最初、翔鶴さんと呼んでいたらしい。しかし、彼女からお姉ちゃんと言われ、呼び方を変えることにしたらしい。何時ものように執務機の横の椅子に座って勉強に勤しむ。何時もの日常であった。そして、その時に学んでいたのが保健体育である。身体筋肉や血液などの動き。そして、「ダメ・絶対」の標語で知られる薬物問題。そして男女の成長による変化であった。

彼はこの項目があることに驚きつつも、初めて彼女に教えてもらうことに抵抗を覚え

た。それもそのはず、既に大人へと成長を遂げていて、憧れでもある女性にそれらのことを教えてもらうのだから。抵抗がないはずがない。すると、教科書の文章を読み終えて、顔の真つ赤な彼の耳に翔鶴は息を吹き掛けた。

『ふあー！』

『女の子みたいな声出すのね』

『止めてよ、翔鶴お姉ちゃん！』

『フフフ♪』

真つ赤な顔をして恥ずかしい思いをするシヨタ提督に翔鶴は笑みを浮かべる。余談であるが、艦娘は全て容貌の整った者ばかりである。性格に難があったり、破天荒な物言いや男勝りな所があったとしても彼女達の容姿には「美少女」「美女」と言っても過言ではないだろう。それは翔鶴などにも当てはまる。腰まで伸ばした銀色に輝く髪に男を惚れさせる美貌。まだ、十代後半と思える顔つきであるにもかかわらず、スタイルは良く出るところ出ている。大の大人でさえ鼻の下を伸ばすような美少女であるのだ。そんな彼女が勉強を教えてくれるなんてなんと幸運であろう。

シヨタ提督は翔鶴に恋心を抱いていた。しかし、子供と言えども曲がりなりにも提督である。頭脳は同年代と比べても良く、翔鶴の横に立つまでにはまだ時間が掛かることも。

『さては、私の事想像しちやっただかな？』

翔鶴は顔を近づけ吐息が掛かる所まで近づける。彼の心臓はバクバクと勢い良く鼓動し、体温が上昇する。

『し、してないもん』

と苦し紛れに彼は言う。無論、嘘である。教科書を読んでいる間、彼の頭の中には翔鶴しか存在していない。それを分かっているのか、翔鶴は悲しそうに顔を伏せる。

『提督は私の事、何にも思っていないのね。私……』

顔を伏せてしまう彼女を見たシヨタ提督は慌てる。苦し紛れに言った台詞が翔鶴を傷付けるなんて思わなかったのだ。彼は、あたふた慌てるが、言ったことを否定すれば悲しまずになると思った。

『ち、違う。ほ、本当は翔鶴のことを……』

好きと言う瞬間、翔鶴はさっきの俯いた雰囲気は嘘のように、満面の笑みを浮かべて提督に抱きついた。

『フッフ、冗談。私の事想ってくれるなんて嬉しいわ』

当然、提督に前から抱きついている。出るところ出ている翔鶴の身体付きは提督にとつては刺激が強すぎであった。

そして、提督は既に男へと成長していた。

『あら、なんか硬いものが?』

その言葉に提督はビクリと身体を震わせ、翔鶴の拘束から逃れた。そう、提督はつい最近から男としての成長を遂げていた。しかし、急な身体の変化に戸惑っていたのである。保健体育の授業でなぜそうなるのか理解したが・・・つまりはそういうことである。

『提督の主砲が・・・』

『えっと、そのごめんなさい!!』

幾ら幼いと言えど、提督はもうそういうお年頃。恥ずかしさのあまり手で隠してしまいが、翔鶴は笑みを浮かべて顔を近づける。

『大丈夫です。それに、私の事想ってくれて感激です』

翔鶴はあろうことが、耳許に顔を近づけると優しく提督の主砲を愛撫し始めたのだ。

『お姉ちゃん・・・!?』

『私は貴方の艦娘、これを沈めなければ勉強に集中できませんよ』

「ちよつと待って、これ何処のコミケ三日目に売ってる同人誌だよ」

剣崎はシヨタ提督から聞かされた内容を聞いてため息混じりに話す。その事を話し

た提督は既に茹で蛸のように真っ赤である。

「その後は……まあ、何て言うか事を為したの？」

「えっとその……、怖くなってここに」

まあ、何かあったことは理解できた。走り回る駆逐艦よりも、そして島風よりも速いのではないかと思うぐらいの走りで憲兵詰め所にやって来た。その事を咎めようとしたが、彼の顔を見て一大事だと察し、中へ招いた。しかし、こんなことになっていようとは、誰も想像しなかっただろう。

手を出したのは提督ではなく、艦娘なのだから。

幾らか年を言っていれば分かる。例えば高校生位ならまだ分かる。中学生ならばボーダーラインギリギリだ。いや、多分ダメだろう。そして小学生。100%犯罪である。

「どうしようか……うむ」

既にセクハラを行う艦娘に対してのマニュアルがある時点で色々和不味いのだが、逆にセクハラを受ける事は例がない。稀な例としては、提督に一途な恋心を寄せる戦艦金剛があるが、彼女の場合は中年の脱サラ提督であり、愛妻家なので無効である。しかし、犯罪っぽいシヨタ提督を誘惑する艦娘は非常に不味いのだ。

「如月曹長に……いや、無理かも」

彼女は若干不味いかもしれない。彼女も彼女でかなりオタクに染まっており、彼女の場合は「小学生の提督?! 良いじゃない! 襲うのを推奨します」と叫ぶのではなからうか。彼女はロリコンの同義語であるが、異性であるシヨタコンなのかもしれない。

劍崎はそう思い、絶対補給科がネタとして持つてきている黒電話に手を掛けようとした。

ダンッ!

擬音語にするなら、それは銃撃音に似ているだろう。しかし、この場合は違った。金属の衝突した音に等しい。

黒電話に突き刺さるのは零式艦上戦闘機であり、パラシュートからパイロットの妖精が降りてきた。

「え、なんだこれ!」

妖精が特攻してくるなんて何の冗談だろうか。パラシュートで降りてくる妖精は驚いているシヨタ提督の頭へチョココンと乗っかってため息を吐いている。

「あらあ、提督は勉強をサボってこんなところにいたんですか。探しました」

劍崎はその声の主である者へ首を向ける。そこには儀装を装着し、正規空母の証である弓を持った空母翔鶴の姿があった。その後ろにはあたふたと慌てる妹の瑞鶴の姿もあった。

「お姉、ちよつとこれは不味いつて」

「瑞鶴、ちよつと黙つて」

「はいー」

その顔はなんと表現すべきだろう。例えるなら、鬼と表現しても良いだろう。こんな顔をする翔鶴を見る者は余りにも少ない。

「さあて、提督さん。勉強を続けましょう」

「ちよつと待て、憲兵が許さ・・・」

と剣崎は止めようと、提督と翔鶴に和つて入つたが、直ぐ様艦爆を向けられた。

「落ち着け、貴様は提督が子供だと言ふことを知つて居るのか！」

「知つています！だからこそ、私は提督を・・・言わせないでください」

「え、どう言ふこと？」

「知らなくていい！」のです！

本当なら愛は年など関係ないと言ふかもしれないが、恥ずかしいのか言えないのだろうか。

「まだ子供だろ？あと五・六年すれば凜々しくなるはずだからさー！」

「そんな、今が良いんです！」

「まだ早熟なんだから見逃せや」



「まだ青いから良いんです！」

会話は平行線を辿り、弓はプルプルと震えている。そろそろ、潮時であろう。

「提督を渡して下さい。さもないと！」

「さもないと、なんだ」

「貴方をロリコンの犯罪者と皆に伝えます！」

「それ、艦爆で撃沈されたほうが良くないか、ソレ!!」

憲兵詰め所には、一触即発の事態を迎えていた。いつ艦爆が発艦して爆撃されてもおかしくない状況であつて、弓に込められた力がゆっくりと無くなりつつあるのが見えた。

そして艦爆が離陸しようとしたその時、脇から艦爆を片手で掴みとり発艦を阻止した人物がいた。普通、そんなことを出来る艦娘が居る筈もなく、ましてや普通の兵士であれば出来ない芸当だ。

「何をやっているのかしら、翔鶴ちゃん？」

その声の主はマフィアも裸足で逃げ出す位の殺気を漂わせ、額の血管が浮き出ている。彼女はこの憲兵詰め所の責任者、如月曹長であつた。

「ひっ！」

その光景を見た瑞鶴は悲鳴を挙げ、まだ幼い提督は泡を吐いて気絶する。バックのB

GMが「ゴゴゴゴゴ！」と流れるようで、その怒りの矛先である翔鶴は最早無条件降伏しか存在しなかった。

「ごめんなさあ〜いいいい!!」

その叫びは区画を越えて鎮守府全てに聞こえてしまった。しかし、何時もの事であると皆はそれを無視した。人間の適応力は非常に強いものであった。

二時間の説教タイムを経て、別室で説教を受けた翔鶴は疲労度限界の顔付きで劍崎とシヨタ提督の元へやって来た。

「提督、ごめんなさい!」

翔鶴はこれまでのことを謝罪した。提督は以外にも満更でもなかったらしく、二人は手を繋いで無事に帰っていった。端から見れば、仲の良い兄弟にすら見える二人は仲良く手を繋いで自身の執務室へと帰っていった。

「ふう・・・さて日誌を書くか」

既に日は落ち、夕暮れ時。劍崎はため息を吐きながらも、机に勤務日誌を出して今日のことを書くこうとするが、今回の一件をオブラートに包みながら書くのは至難の技で

あつた。

しかし、どのように翔鶴を説教したのだろうか。

劍崎はその事が気になり、近くの机で書類作成に追われる如月に声を掛けた。

「曹長、翔鶴に何と言つたんです？」

「え？ 簡単なことよ」

と、曹長は笑つて答えた。

「自分好みに育てなさいって言つたのよ」

「光源氏か！」

その叫びは執務室のシヨタ提督に届くことなく、翔鶴による提督育成計画は着々と進んでいくのであつた。